

剣道試合の現状

小森富士登

Current state of Kendo game

Fujito Komori

キーワード：剣道、防護、

Key Word : Kendo, Defense

I 【はじめに】

日本伝統文化の1つである剣道は、第二次世界大戦敗戦後、連合国軍の占領下におかれた日本では剣道は抑圧されていた。占領下当時は、名前を変更（撲競技）して行われていたが、昭和27年（1952）に全日本剣道連盟が結成されるとともに甦った。現在日本では、剣道は人間形成の有効な手段として教育界にその根をおろし知育・体育さらに道徳教育の一環として考えられ、教育組織における体育教育のプログラム（武道）として構成され、2011年（平成23年）には武道が全国中等学校で正課授業として行われる。また、老若男女を問わず、庶民の間に拡がり数百万人に及ぶ幅広い年齢層の愛好家が竹刀を持ち、ともに剣道の修行に励んでいる。そしてまた、先人の努力により国境を越え世界に普及発展した。世界各地で剣道を愛好する剣道家たちの要望により、昭和45年（1970）には国際剣道連盟が結成され、第1回世界剣道選手権大会が日本武道館において開催された。それと共に各国において国際大会も行われるようになり、剣道の競技化にますます拍車がますようになった。そして、その競技力が注目されるようになった。

剣道の競技力は、技術・体力・精神力によって争われるが、我が国では剣道は日本で創設されたものであり、本家としての剣道精神の浸透から、日本選手と比較して体格の大きい外国人選手と対戦しても体得した技術をもっていれば必ず勝てるという自負があった。しかし、昨年の2006年12月に台湾において第13回世界剣道選手権大会が開催された。47カ国・地域がエントリーを行い、うち参加国44カ国・地域からの参加者586名（選手と役員の重複あり）が集まった。そこで過去12回大会の全部

門を制覇してきた本家日本は、男子団体戦の準決勝戦でアメリカ合衆国に敗退しその一角が崩れたのである。

これまでの過去の試合を見れば、韓国が日本の最大のライバルであったが、世界との実力の差はなくなりつつある現状である。

この結果を見通すように数年前より、スポーツ化による試合偏重主義傾向²⁾・文化的価値の喪失¹⁾・武道精神の希薄化^{1) 4)}などの問題が山積みされていたのである。本家日本では今日の剣道は剣道本来の姿ではないとか剣道の教育的価値を指導上活かしていないなどの批判も聞かれた。そして、このような議論の中には、「剣道の試合がつまらない」「剣道は本当に人間形成に役立つか?」「今日の国際化時代を生きていく若人たちの教育に剣道は有効機能しているのか?」と言ったものもあり、学校教育での剣道指導者の責務は大きいと思われる。このような批判の中、特に試合偏重主義傾向など懸念して全日本剣道連盟は今までに諸問題に則した剣道試合・審判規則の改正をしてきた。

これまでの規則の改正では、勝利至上主義的な試合の傾向が多くみられたことから「鍔せり合い」に関することが中心であった。しかし、昨今は試合の内容を問われることが数多く聞かれるようになった。

全日本剣道連盟 50 周年を記念して開催されている「剣道文化講演会」の第 6 回が平成 19 年 12 月 1 日に九段会館ホールで開催された。剣道範士森島建男氏による「心の修行と現代剣道」の講演で、「剣道が大変乱れてまいりました。本来、日本の剣道は攻撃的剣道であったものが、最近の剣道は防護が主になってしましました。今から十五、六年前なるでしょうか、突然、相手の攻撃を竹刀でよけて面も小手も胴も防ぐといった三方防ぎという奇手が出現しました。試合には有利だったかもしれません、そういう高校がインターハイで優勝しました。瞬く間にその剣風が全国に広まった。まさに燎原の火のごとし、という言葉がございますが、その弊害が大学・警察はもとより、一般の試合に蔓延しました。そして現在でもまだ直らないのが現状です。」と述べている。

中でも、高等学校・大学における剣道試合の批判が中心的である。

そこで、大学女子公式剣道試合の試合結果（勝敗・取得技・引き分け・取得本数）などの資料を得ることができたので、その内容・実態を調査・検討し、若干の知見を得たので報告し、有効的な指導方法を確立するための基礎的資料とすることを目的とする。

II 【被検者】

2007年9月に開催された、世田谷6大学剣道大会（国士館大学・日本体育大学・國學院大学・駒沢大学・東京農業大学・東京女子体育大学・日本女子体育大学）の大学女子選手18歳から22歳、段位は2段から4段の団体戦（5人制リーグ戦）で試合方法は勝者数法である。

III 【試合結果と考察】

1. 試合結果

表－1は、団体戦（5人制リーグ戦）105試合の勝数結果である。

表－1 団体戦 105 試合での勝数結果

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
1本勝ち試合数	5	7	4	9	3
2本勝ち試合数	2	3	5	5	5
2対1の試合数	1	0	0	0	0

表－2は、団体戦（5人制リーグ戦）105試合の引き分け結果である。

表－2 団体戦 105 試合での引き分け結果

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
効打突のある引き分け	3	0	1	0	2
効打突のない引き分け	10	11	11	7	11

表－1の勝数試合は105試合中49試合（46.67%）であった。その内容は、1本勝ちが28試合で勝率は26.67%であり、2本勝ちは21試合で勝率は20%であった。

また、表－2の引き分け試合は105試合中56試合（53.33%）であった。有効打突のある引き分け試合が6試合で5.71%であり、有効打突のない引き分け試合は50試合で47.62%であった。

1本勝ちが2本勝ちより上まわっていることや有効打突のない引き分けが多く、

更に、相方が有効打突取得後の勝負で試合が決したのは1試合のみであることなどから、勝敗に拘り勝負の決着をつけない負けない剣道の試合（試合偏重・勝利主義）を展開されていることが推察される。

表－3は、団体戦105試合での有効打突の技の種類（しきけ技）である。

表－3 団体戦105試合での有効打突の技の種類と本数。攻撃技（しきけ技）

跳び込み面	25本
出ばな面	10本
引き面	13本
出ばな小手	13本
跳び込み小手	6本
引き小手	2本
突き	1本
引き胴	5本
計	75本

表－4は、団体戦105試合での有効打突の技の種類（応じ技）である。

表－4 団体戦105試合での有効打突の技の種類と本数。反撃技（応じ技）

抜き面	3本
抜き胴	1本
返し面	4本
返し胴	1本
計	9本

技は大きく分けると、「攻撃技（しきけ技）」と「反撃技（応じ技）」の二つに分かれる。団体戦105試合での有効打突は、しきけ技が75本で応じ技が9本の合計84本であった。表－3のしきけ技は、75本で有効打突総数の89.93%であった。

また、表－4の応じ技は、9本で有効打突総数の10.07%であった。

これらの試合結果より、一方がしきけ技を出せば一方は応じ技で反撃するのではなく防御するという剣道の試合が展開されている。つまり、相手の技をまるで無視した自分勝手な防御を主体とした試合が展開されていることが推察される。

これでは、つばぜり合いの回数が多くなるはずであり試合時間の半分を占めるのも当然である。全日本剣道連盟がつばぜり合い規則の改正を繰り返し行ってきたことも理解できる。

IV 【回帰の方法】

このように森島が指摘している「防御を主体とした剣道の試合」が展開されているのである。そこで、防御を主体とした剣道の試合を攻撃を主体とした試合に回帰することが必要である。

回帰の方法として次のようなことが考えられる。先人の教えを引用すると、

① 先を制すること。

三つの先について、「五輪書」の火の巻を引用すると、

一、三つの先と云事三つの先、一つは、我方より敵へかかるせん、けん（懸）の先と云也。亦一つは、敵より我方へかかる時の先、是はたい（待）の先と云也。又一つは我もかかり、敵もかかりあふ時の先、体々の先と云。是三つの先也。いずれの戦初めにも、此三つの先より外はなし。先の次第を以、はや勝事を得る物なれば、先と云事、兵法の第一也。此先の子細様々ありといへども、其時の理を先とし、敵の心を見、我兵法の智恵を以て勝事なれば、こまやかに書わくる事にあらず。

また、一刀流では三つの先について、高野佐三郎著「剣道」³⁾では次のように解説している。

剣道に於ては機先を制する事最も必要なり。勝敗を決するは實に先を得ると否とに在り先々の先、先、及び後の先是れなり。

先々の先と謂ふは、彼我相対し勝敗を争ふ時敵の起りを早く機微の間に認めて直ちに撃込み機先を制するをいふ。

先又は先前の先といふは、隙を認めて敵よりの撃込み来るを敵の先が功を奏せざる前に早く先を取りて勝を制するをいふ。

後の先又は先後の先といふは、隙を認めて敵よりの撃込み来たるを、切落し太刀を凌きて後に敵の氣勢の廢れる所を見かけ、強く撃込みて勝をいふ。

先を求むる為めには千変万化の掛け引きを要すと雖もすべて勝は此三つの先によるの外なきものとす。

このように表現はそれぞれ違うが、先が剣道の勝敗に大きく関係しているのである。

② 攻撃は最大の防御である。

攻撃あるのみについて、高野佐三郎著「剣道」³⁾ では次のように解説している。

剣道には攻むるありて受くるも防ぐもなきものなり。初心の物往々敵の撃つ太刀をば受け留め受け流すを以て能事了れりとなすものあり。誤まれるの甚だしきものと謂ふ可し。共に命をかけて敵を斬らん斬らんと努むることなれば、出来るだけの注意を以て敵の撃つ太刀、突く太刀を、かはし、外づし切落し受流さざれば危し。然れどもこれただ敵を撃ち突くの一階段のみ。先を取らんが為の一手段のみ。かはすも、外づすも、切落すも、受くるも張るも、同時に切る太刀、突く太刀ならざるべからず。切落すといひても敵の太刀を切落して後勝つにあらず、石化の位とも、間髪を容れずとも切落すと同時に何時の間にか敵に當る。切落すと撃つと一拍子なること肝要なり。受くるといふことなく撃つ太刀が取りも直さず受くる太刀となるやう心懸くべし。故に敵に何等の術を施さしめず、先々の先を以て勝を占むるを上乗とす、我が撃込むと同時に敵も撃来らば、かはし、外づし、摺上げ、又は応じ返しに先前の先にて勝つ。敵が先に撃来らば切落し又は太刀を凌きて後の先にて勝つ。敵に勝つの法一つとして攻撃ならざるは無し。唯防ぐだけならば如何に巧に防ぐとも敵に先を與ふるに過ぎざるなり。この事精神より見るも技術より見るも甚だ必要なり。

これらの表現に、日本剣道の特色（積極的・攻撃を尚び・受け身を戒め）が現れていると思われる。

③ 懸待一致の心得

懸待一致について、高野佐三郎著「剣道」³⁾ では次のように解説している。

「受くるも、張るも、摺り上ぐるも切落すも、同時に撃つ太刀突く太刀ならざ

るべからず。撃つ太刀突く太刀ならざるべからず。撃つ太刀突く太刀は亦取りも直さず防ぐ太刀となる。防禦は攻撃の為にして、攻撃はおのずから防禦となるなり。懸るに専らなれば我が起りに先んじて敵より撃たるれば、之に応ずる能はずして撃たるるか相撲となるの外なるべく、待つに専らなれば全く我太刀は死太刀となる。懸る中に待ちあり待つ中に懸りあり、懸待一致して遂に懸もなく待なき境に至らんことを努むべし。これ懸中待待中懸の教へなり。茲に到らざれば敵に応じて変化し勝を得るの至妙に達すること能はず。」

また、「柳生兵法家伝書」では

懸とは立ちあふやいなや、一念をかけてきびしく切りてかかり、先の太刀をいれんとかかるを懸と云うなり。敵の心にありても我心にても懸の心持は同時也。待とは率爾にきてかからずして敵の仕かくる先を待を云也。きびしく用心して居るを待と心得べし。懸待はかかると待との二つ也。

心をば待に身をば懸にすべし。なぜなれば心は油断なくはたらかして、心を懸にして、太刀をば待にして人に先をさするの心也。身と云は即ち太刀を持つ手と心得ればすむ也。然らば心は懸に身は待と云也。両意なれども極る所は同じ心也。とかく敵に先をさせて勝也。

このように流派によって多少の表現に違いはあるものの、打ち懸かる中にも待ちがあり、待つ中にも懸かるがある。攻めつつ守り、守りつつ攻める両方の気が重要であるを説明している。一つの攻めが表裏の意味を持ちあわせていることを体得すれば、必勝の極意ともなりえると思われる。

V 【むすび】

今回、世田谷六大学女子剣道試合（105）を検討した結果、次のような知見を得た。

- 1) 勝敗数より引き分け数が上まっており、勝負に拘った試合が展開されている事が推察された。
- 2) 応じ技による有効打突は、しけけ技による有効打突より極端に少なく防御主体の試合が展開されていることが推察された。
- 3) 日本剣道の特色である攻撃を中心とした剣道に回帰する必要がある。その為の指導者の育成が必要と思われる。

引用・参考文献

- 1) 馬場武則：「剣道礼法と作法」体育とスポーツ出版社、pp 12～pp 28, 1990.
- 2) 月刊武道：317号(4月号). pp.118-121.1993年
- 3) 高野佐三郎：「剣道」島津書房、p.161～165.
- 4) 田中鎮雄：「文部省の学校武道指導指針の史的展開過程(1)」武道学研究、第13卷3号 1981